

昭和48年4月15日発行・第41号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

4月号



Libertaire VoL, IV, No5

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十五年四月十五日発行第四

定価一〇〇円(送料共)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和48年4月15日発行 Vo., IV No. 5

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)

目次

遺 詠	萩原道子	1
大杉が「社会理想論」 を書いた頃の事	塩長五郎	2
滅びゆく東京の戦跡	ハギシン	5
国家神道は汚れた海で 禊祓を行なえ	菅 輝生	8
ポーランド共産党への公開状 『反官僚革命』に対する疑問	SEOT No. 7	10
カレン民族小誌	岩永文夫	19
野 火		12

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナリズムは永遠の思想であり、普遍の思想である。これを歴史的、地理的、社会的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナリズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立って、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナリスト（リベルテール）のグループであることに変わりはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとづくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変りはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦を戦かう（三浦）

遺 詠

萩原道子

（一九七一年）

農民の土にかけたる執念も権力の前には総崩れせり

三里塚の農民トリデは敗れたり愛する土地も我物に非ず

「橋のない川」の映画をみて泣きぬ後ケ迫の主婦ら想ひて

プラカード掲げて吾子ら出で行けり市民の集ひのデモ行進に

（一九七三年一月一日）

インテリの弱さか連合赤軍の首謀者獄舎に自殺せしてふ

大杉が『社会理想論』を書いた頃の事

1 アナキズム史論の曲折 その一

塩 長 五 郎

最近若い人々によって、大杉栄研究が発表されている。これはアナキズムの発展のためにも実に喜ばしいことで、大いに歓迎すべきであるが、一ツ気になることは、大杉の『社会理想論』に対するとりあげ方が、いささか正確さを欠いており、只一方的に大杉の主意を讚美して、クロボトキンのいわんとした主旨には全然ふれないことである。『社会理想論』はクロボトキンの提案に対する大杉の反撥文でもある。従ってクロボトキンの提案をも吟味せずには正当な評価は成立たない。これには大杉が発表した大正九年頃、既に一部の人々の間で物議をかもしたことがあり、私はこれを思い起しながら当時の実相を語ることにしたい。

クロボトキンは一九一七年のロシア革命が勃発してから間もなく、イギリスから祖国に帰り、ボルシェヴィキ政権の現状をつぶさに目撃して、この実状を憂い、西欧の労働者に革命の何たるかを知らせるために、「西欧諸国の労働者に与う」という檄文を発表したものである。このなかには労働者の組織と、その組織が複雑な経済問

題をも処理し得る能力を持たねばならぬことの必要を強調したもので、次のように云っていた。「ソヴェエツト即ち労働会議の思想は、最初一九〇五年の革命時に企画され唱導されて、一九一七年二月の革命によってツァーの政権が転覆するや否や、直ちに実現されたもので、国の政治的経済的の生活を支配する偉大な思想である。しかしこれが一党の独裁政権によって支配されている限り、労働会議は明かにその全意義を失ってしまふ。これは革命が新経済基礎の下に新社会を建設しようとするためには死刑の宣告である。」（内山賢次訳）と。つまり革命時に際しては、労働者は労働会議を堅持し運営してゆく力を持たねばならない。これは労働者の将来社会への新しい観念であり、この観念をしつかり持たないと、一党独裁の政党に牛耳られてしまふ。だから西欧諸国の労働者よこの新しい観念をしつかり把持せよと云うのがクロボトキンの主旨であった。ところが大杉の『社会理想論』では、この事情がまだ理解されていないように思えるし、労働会議の実状もわかってはいない。こ

れには当時の日本の情勢が然らしめたものもあり、何しろ大正九年前期頃は、日本の社会主義者にとって、ロシア革命は史上始めて成功した労働者革命であり、その賞讃は文句なしの、手放しの絶讃であった。況んやボルシェヴィキの一党が、アナキストに迫害を加えていたなどのことは、まだ想像もしていなかった時である。それに当時日本の情勢も、その頃ようやく社会主義運動と労働運動とが相提携し、社会主義と名のつくものは、右翼左翼を問わずに、全部大同団結して、日本社会主義同盟を結成しようとする準備期でもあった。であるから革命時に党が労働者を弾圧するというようなことは考えられもしなかったし、それに労働会議なるものの実相もわかっていたわけではない。だからクロボトキンの云う新しい観念とは、種々なるイズムぐらいいにしか、大杉はうけとめていなかったようである。だから彼は次のように云っている。「新社会組織についての観念、即ち社会の理想といったところで、まずどんな観念、どんな理想を持てばいいのか分らない。それには労働者の目の前に、すでにいろんな見本ができている。無政府主義のそれもある。社会民主主義のそれもある。センヂカリズムもある。ギルド社会主義もある。しかし労働者はますますには、その中のどれを選べばいいのか分らない。いづれもみなそ

れ相応に、もっともらしい理屈を持っているが、その中のどれが一番いいのか労働者にはまだ本当には分らない。それに労働者は、そんな観念とか理想とかの見本を、理屈の上で比較研究する前に、そのせつばつまった生活の少々でも、改善をはからなければならぬ。それが労働者の目下の急務だ。」（社会理想論）と云い、「だからそんな観念や理想よりも、労働者の自主心をしつかり持つようにした方が余程ましだ」と云うのが大杉の言い分である。しかしこれでは日頃個人革命を要求していた意味もなければ、アナキズムを他のイズムよりも優先する意味もない。これは明かにクロボトキンの主旨を誤解したものではなからうか？

これが誤解であるか否かの論議が、当時加藤一夫の率いる自由人連盟の会合で、物議をかましたのである。きっかけになったのは、自由人連盟の機関紙「自由人」（大正九年十一月号）に、内山賢次が例のクロボトキンの「西欧諸国の労働者に与う」の全文を訳載したことだからである。これを読んだ津田光造（辻潤の義弟）と佐野袈裟美とが、大杉の「社会理想論」とを対照しながら、アナキストは体系を持つべきか否かの議論で会合を賑わした。これがどのように結末したのか、今ではおぼえていないが、後日私はクロボトキンの例の書と、大杉の「社会理

想論」とを読み較べて、津田、佐野両氏が、大杉の説を非難した理由が解るように思え、これは大杉の誤解ではなからうかと思ふようになった。

革命時に労働会議を堅持し、これを運営するためにはクロボトキンの云うように、複雑な経済問題をも処理し得る能力を持たねばならないことは当然ではなからうか？とすればアナキストとても、将来社会のイメージをもつためにも、体系を保持する必要がある。しかし当時そのような提案は、異説として斥けられる傾向にあった。と云うのは、当時次第にサンジカリズムが、燎原の火のように燃えあがってきた時で、総合雑誌にもサンジカリズムを論じた評論が毎時のように出ていたし、大杉も労働運動社の場席で、吾々青年を相手に、よくサンジカリズムを語った。

サンジカリズムには理屈はいらない。労働者の自由な直感と本能とが創造力を発揮するのだ。これでよいのだ。——と云って勇氣と実行力とを鼓舞した。このように雲囲気の中で、体系認識の思想が育つ筈がない。

こうした傾向が、次第に知識階級指導者排撃論に変わり、友愛会系の労働総同盟の幹部に強い衝撃を与えた。折角日本社会主義同盟が結成されて、社会主義運動と労働運動とが提携し始めたのに、同盟は間もなく政府の手

で解散させられてしまし、それに一方労働組合運動も、次第に自主的傾向を発揮してきて、指導者をうとんじる傾向が強くなってきた。それで労働総同盟幹部の間では、こうしたサンジカリズムの傾向を押えるために、次第に統制の必要を感じ出し、これが中央集権主義を唱えるようになってきたのである。

それが遂に、大正十一年十月の大阪における総連合大会において、中央集権主義か自由連合主義かの大激論となり、その末、日本の労働組合運動は真二つに割れてしまった。そして社会主義者間の摩擦も表面に出て来た（堺・山川派と大杉一派とに分れた）これは大杉が「社会理想論」を書いた時の情勢とは全く違ったものである。もし地点でクロボトキンの「西欧諸国の労働者に与う」に接したのだったら、おそらく「社会理想論」の内容にはならなかったと思う。そこで私が思うのには、それにも係わらず自由人連盟の両氏が、既にあの地点でクロボトキンの主旨を支持し、大杉の説を非難した事実は、何を物語るであろうか？、これは大杉と両氏との間に、体系認識の相違があったか、もしくは革命に対する視点の相違があったか、その何れかがあったからである。大杉の革命観には多分に楽観的なところがないと

はいえない。

大杉は「社会理想論」を書いてから後に、やがてマフノ農民運動や、クロンシュタットの反乱の真相を知り、ボルシェヴィキの暴政を糾弾する態度に転じたが、遂にクロボトキンの労働会議の思想には一指をも入れずに、惜くも生命を断たれてしまった。これは返す返すも残念なことである。一方自由人連盟の人々はどうか？彼等はクロボトキンの労働会議の思想を支持し、社会的な体系の必要を求めていたが、加藤一夫は関東大震災の時に検挙され、やがて東京退去命令によって兵庫県芦屋に退去され、それから農民自治会に参加して農本主義

滅びゆく東京の戦跡

ヨーロッパでは中世の建物や史蹟が大切に保存されている。アメリカは誇るべき伝統がないから、端的に近代化していく。日本は土地がせまいという事もあるが、悪くアメリカナイズされた為、古い建物も記念物も片っ端から打ちこわされて、高層ビルが建ち煙突が櫛比し高速道路が張りめぐらされていく。ことに東京は息も詰るばかりの公害都市となった。関東大震災や戦災から助かった大切な面影も殆んど失われてしまっている。私たちや

や東洋思想の研究に転じた。津田光造も昭和二年頃「東洋の再建」なる書を著して、自ら街道に進出して、これを宣伝しながら売り歩いた。佐野袈裟美は大正十五年「文芸戦線」がアナ・ボルに分裂した際、マルクス主義者になって、アナキストから袂を分ちてしまった。その後クロボトキンの労働会議の思想の問題は、うやむやに消えてしまったが、大杉の「社会理想論」を思い出すたびに私の脳裡に去来し、これはクロボトキン研究のためにも、大杉栄研究のためにも重要なポイントだと今でも思っている。

ハギシン

先輩の運動のあとが、どう変わっているか略記しよう。

〔神田日活〕

昔の映画（活動写真といった）は、セリフの字幕つきか、活動弁士のセリフと解説つきであった。日活常設館の弁士は、大正後期に何回カストをおこした。音の出ないテレビや映画がどんなに面白くないかはお分かりだろう。神保町と駿河台の間に神田日活があった。ここが戦前の姿をとどめていたのは一九六八年二月迄であった。

年が変ると看板がおろされて、大改造がはじまった。種苗会社に身売りしてしまつたのである。

〔東京拘留所〕

スガモブリズンの名は、戦後世界に知れわたつた。東条英機ら戦犯が、絞首台の露と消えた所である。つい最近まで全学連の諸君もここで面倒をみて貰っていた。高い塀にかこまれ、正面に差入屋があつた。

七二年に官舎ともども完全にこわされた。高層ビルが建つそうだ。寝食つきの官費の別荘は小菅に移管された。戦前、巢鴨には精神病院があつた。東京府立松沢病院の前身である。当時「巢鴨行き」といえば気遣いを意味したが、社会主義者にとつて、巢鴨行きは監獄入りの事だつた。二見敏雄がこんな話をした事がある。

「うまい漬物が食いたくなつたら、長野で捕まれ。長野刑務所の漬物は日本一だ。大きなコンクリート桶で漬けるので、醗酵してウマイ物ができるのだ。魚なら千葉か四国だ、ジャガ芋と鮭が食いたくなつたら、北海道でアパレルといひ。だが網走は入ると一寸長いからな」

東京名物はオデンと握りズシだが、巢鴨ではそんな物は食べさせなかつただろう。

〔三田〕

東京労組の戦跡三田車庫も、今は廢屋と化した。いず

れ下駄バキマンションとなるであろう。この筋向いに沖野岩三郎のユニテリアン教会があつた。「六合雑誌」をはじめ、日本の社会主義運動の拠点となつた所だ。安部磯雄らの社会主義研究会の集会場にも利用された。鈴木文治らの友愛会（のちの総同盟）の事務所にもなつた。教会の隣には女学校があつた。

今は自動車会社が建ち、教会も学校もなく、昔をしのぶ面影は全くない。

ここから少し品川寄りに、サント・マリウス・インタナショナルスクールがある。この校庭の奥に碑がある。

一六二三（元和九）年二月四日、徳川家光が、エロニモ・デアアンセリス、シモン遠甫、フランシスコ・カルヴェス、原主水ら五〇名のキリシタン宗徒男子を火刑に処した。この受難記念の碑である。

〔赤坂〕

一九二三（大正一二）年六月二六日早朝、「戦線同盟」の高尾平兵衛、平岩巖、吉田一、長山直厚は赤坂溜池の「赤化防止団本部」弁護士米村嘉一郎をおそつた。そして高尾は二七才の若さで米村に射殺され、日本最初の社会葬で弔われた。彼が死を以てあがなつた協同戦線はこれを機に漸く結実した。だがその二カ月余後の大震災時の白色テロル、治安維持法と抱き合せの普選実施、労組

の右傾、軍国化によってあえなく戦線は崩れていった。

一九三三（昭和八）年二月二〇日、特高に追われた小林多喜二は、赤坂溜池の市電通りで大格闘した。三船というスバイにだまされ、街頭連絡に出た所を発見されたのだ。肺結核で体力の衰えていた小林は、あえなく捕つた。そして築地署で、血便血尿を出して昏倒するまで拷問され、ついに虐殺された。

今は電車もなくなり、ホテルやビルが建ちならび、近くを高速道路が走っている。

〔練馬〕

練馬区は戦前は板橋区に属した。昔は練馬大根で知られるように畠と山林ばかりで、工場は殆んどなかつた。従つて戦前労働運動があつたのは洋モス（東洋モスリン）練馬工場ぐらいのものである。

一九二六（大正一五）年二月一六日、この六名が評議会系の組合に加わつて臆首され、紛争をおこした。

のち鐘紡となり、組合は総同盟に属した。西武鉄道（旧武蔵野鉄道）練馬駅に接し、工場に直接入出荷できるように、外壁に面したホームができていた。畠のマン中の工場という感じで、のち周囲に民家が密集したが、赤煉瓦造りの工場、トタン張りの汚い寄宿舎は昔ながらであつた。

だがこれも七二年に入って早々にこわされた。地域開発とやらだそうだ。目下トタンがこいの中は見わたす限りの原っぱとなつている。……

練馬郵便局は一三間道路に面して堂々たるビルである。昔の建物はいま運送会社になつている。粗末を木造で一階が郵便、貯金、電信、二階が電話交換室であつた。

一九四八（昭和二三）年、私らと練馬労連を組織し、この全通が連絡事務所となつた。……

東京電力練馬変電所は、昔は水冷式変圧器を使つていた。木骨モルタルの古びた建物であつた。前を仙川が流れ、桜並木が美しく、全く田舎の変電所の感があつた。

一九五〇年、この変電所で所長制度廃止・自治管理を行つた。同年八月二六日、電気産業労働者二、一三七名がレッドパーシを受けた。私もここで数十名の武装警官隊に包囲されて、強制職場退去となつたのである。

今は組合は猫よりもオトナシク、この変電所のヒバ垣も万年塀にかわり、設備も更新され建物も新築、川は暗渠となり桜は朽ちてなく、以前の面影は皆無だ。……

戦後の西武鉄道は、ストがない事を誇る徹底した御用組合だが、戦前はかなり活発にたつた。

経営もひどく、税務署に差押えられぬよう、各駅の売上をたえずカキ集めては諸支払にあてていたという。

鉄道の鷲宮変電所（今は床屋になっている）には、前記の東電練馬から送電していた。東電の夜勤者は「千里眼」と称して、翌朝の分までメーターの記録を台帳に書きこんでから寝るならわしであった。

さて、西武鉄道で始発から抜打ちストが敢行された。練馬変電所の当直者Tは、翌朝あわてふためいて記録を書きなおしたというエピソードがある。……
まだまだタネは一杯あるが、今回はこれで止めておく。

国家神道は汚れた海で禊祓を行なえ！

菅 輝 生

事はすでに旧聞に属することかも知れぬが、過日、テレビを見てみると、沖縄海洋博の起工式の中継録画が放映されていた。じつは、たいした興味もなく何気なく見ていたわけだが、白装束（斎服）の立派な沖繩神社の神職たちが海に向って祓を行なっているのを見ていて、僕はビックリするとともにだんだんハラが立ってき

社庁の神職たちは、ウチナワやヤマトの古神道の「禊祓」の本義をすこしも理解することなく、己が無知をさらけだし、こともあるうに清浄なる海に向って祓を行なったのである。否、じつは、彼らはポスト沖繩海洋博の沖繩の海が汚れていくであろうことを先取りして、こんな海で禊祓をしても己れの身を清めることができぬことを百も承知していたのである。

というのは、祓とは、私見では、神に奉仕するため己れの身についた穢を清めるために行なうものである。しかも、この場合、ヤマトやウチナワの古神道によれば、海とは、汚れた己が身を濯ぎ清める（＝禊祓する）ための場であって、ましてや祓を行なうべき対象では決してないのである。

ところが、ヤマトンチューの国家神道に属する沖繩神

つまり、彼らは穢れた身で神前に奉仕するという、神への冒トクを平気でおかしたのである。がしかしここで、この事実にかしらの加えて検討すれば、彼らには神道者としての良心が多少なりとも遺っているため、自然神の齋きおわす自然をブルトナーザーで破壊する行為に加担するために、わざわざ身を清める必要はない、と考えたに相違ないのである。いいかえれば、彼らは、世の莫迦

な唯物論者と同じく、あるいは日本列島改造案を推唱する宰相の如く、ウブスナの神々の存在を革命的に否定するという天津罪・国津罪をおかしているのである。

2

禊祓の起源は、『古事記』や『日本書紀』によれば、イザナギが黄泉国へ亡妻イザナミを追って行ったとき、その身についた穢汚を祓い清めるために、筑紫国の日向の橋の小戸の橋原に到りまして、ミソギ祓いをされたこととに始まる、とされている。そして、イザナギはこのミソギを契機としてアマテラス、ツクヨミ、スサノヲの三貴子を生んでいる。この場合イザナギが禊祓した場所は川であるけれども、古代においては川ばかりでなく、清い海浜においても盛に行なわれていたらしい。今日でも南島にはこの風が遺っており、ウチナワの祝女（ノロ）たちは海浜でミソギを行なうとのことである。

吾が青ヶ島でも戦前まではこの風は遺っており、今でこそ海水につかってミソギをするという古風の人はいないが、それでも時々潮花といって海水を竹筒につめたもので神前や身を清めたり、竹笹に海水をつけたもので祓をするということもあり、僕なども時々はかようなことをすることもある。

それはともかくとして、今日、禊祓の古義を理解して

いるのは、国家神道が無視してきた、民間の古神道を奉ずる常民や、一部の神道系新興教団だけである。

このことは何を意味しているか。つまり、**「ミソギハラへ」**を忘却した国家神道には、神道にとつて海が何んたるかを理解してないのである。と同時に、彼らには、海の向うに常世の国あるいはニライカйнаとしての根の国、底の国、妣の国であり、それが天と団体となっていることに気付かないのである。そして、こんな日本国には、日蓮ではないが、アマテラス以下の諸々の神々はいない、ということを知らないのである。

結論的にいえば、彼らは、海を汚染し自然を破壊する権力や公害企業に、その祭祀をもつて加担しているのである。

僕の論旨は支離滅裂ではあるが、僕が提起したいことは、こうした国家神道を奉ずる連中を、田子の浦や水俣湾やその他の汚染された海まで連れて行き、アタマからケツの穴までタツブリと汚染した海水につけさせ、ミソギをさせる必要がある、ということである。

▲国家神道は汚れた海で禊祓を行なえ！

（一九七三・四・一）

菅 輝 生